

## 2023 年 保育学研究 第 61 卷 特集論文

### テーマ：持続可能な社会と保育 —SDGs 時代の保育を考える—

COVID-19 が世界中で猛威をふるい、気候変動などの問題が日常生活を揺るがしている現代、私たちは経済成長一辺倒の社会基盤がいかに脆弱であることを思い知らされている。保育現場では、近年、夏季には高温注意情報の発表が多発し、戸外遊びが制限されるようになっていたり、2020 年春以降、COVID-19 への対応で保育のありようの見直しに迫られたりしており、保育という営みも地球規模の環境の変化に連なっていることに気付かされる。

このような地球規模の危機に対しては、すでに 50 年前に「このまま人口増加、環境汚染、資源消費などが続けば、100 年以内に地球上の成長は限界に達する」と警鐘がならされおり、(1978、ローマクラブ)、持続可能な社会を目指すとき、残された時間はそう多くはない。何も手をうたなければ、今世紀末には地球の平均気温は 4 度上昇すると試算されており、そうなれば私たちは次につながる世代に平穏で平和な日々を残すことが難しくなる。そこで、国連をプラットフォームにして持続可能な社会を目指す枠組みについての議論が深められ、2015 年に持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals=SDGs) が書かれた国連文書が採択された。SDGs は誰一人取り残さない持続可能で多様性と包摂性のある社会を実現するため、17 の目標とその細目にあたる 169 のターゲット・232 の指標から構成され、2030 年を期限として世界中全ての国や企業や人が取り組むべき普遍的な目標として捉えられている。2016 年には日本版 SDGs の 17 のアイコンも発表され、多くの企業や地域が行動変容を具体化している。

翻って保育学との関係を見ると、海外の実践例を取り上げた研究や、環境教育と関連付けた研究は見られる。あるいは実践としては「SDGs の実践園」と謳う保育施設のホームページも見られる。しかし、持続可能な社会を目指すということはどういうことか、保育はこの流れの中にどのように連なることが可能なのか、あるいは持続可能な社会の担い手を育むための教育である ESD との関連はどうか、ということになるとまだ十分に研究の成果が積み重なっていないと思われる。

そこで、第 61 巻の特集は「持続可能な社会と保育—SDGs 時代の保育を考える」とした。SDGs が目指しているのは行動変容を伴う価値観の転換である。哲学的に、理念的に、実践的に、あらゆる方面から持続可能な社会とこれからの保育のありようを問う研究の投稿を期待したい。

(文責 河邊貴子)